

ヴェトナムケンキュウブンケン : バーナード・B・ フォールノチヨサクニツイテ

小沼, 新
宮崎大学教育学部講師

<https://doi.org/10.15017/1598>

出版情報 : 法政研究. 36 (1), pp.129-137, 1970-02-20. 九州大学法政学会
バージョン :
権利関係 :



ヴェトナム研究文献

——バーナード・B・フォールの著作について——

小沼 新

書評

私が「ヴェトナム戦争の起源」を自分の研究テーマとして、二、三の稚拙な小論を書いている内に、四年が過ぎた。当初は、テーマの大きさに悩んだが、今ではこの選択に半ば満足を感じている。何故なら、現在ポスト・ヴェトナムが公然と語られているけれど、ヴェトナム戦争こそが、戦後世界史の一時期を画す分岐点となったからである。そこには、好むと好まざるとにかかわらず、種々の政治学的問題が充満している。帝国主義（新植民地主義）対民族民主革命（民族解放運動）。限定局地戦

争対高度ゲリラ戦。社会主義国と民族解放運動の関係。ラッセル法延に象徴される現代の法的、倫理的問題。戦争の終結の方法について。そして、世界は勿論のこと、日本のヴェトナム戦争加担によって起った我が国のいるるな反戦運動など。これら全てについて、私達はこの後の国際政治の展開の中で、この経験を教訓としてどう生かして行くかという課題を負わされたのである。しかもまだヴェトナム戦争は終わっていない。

ヴェトナム戦争の最盛期には、年間三〇冊以上発刊さ

れた読物も近頃やっと底をついた。勿論、全てがいわゆる読物であったと言うのではない。しかしあの時期に啓蒙の役割を果たしたそれらの書物を乗りこえて、今、私達研究を志すものの季節がやって来たと言えるであろう。問題意識の解明は、歴史的かつ論理的でなければならぬ。私達は先達の後をたどる事によって（勿論ヴェトナム現地に赴き、自ら確かめるのが一番だが）、特にアメリカ、フランス、ヴェトナムの学者の文献を参考にし、自らの論理と歴史的事実の相互緊張と検証の弁証法的発展をとげながら、作業を進めなければならない。ところで外国文献を資料とする場合、それはいろいろの問題を含んでいる。外国文献にもキワモノはある。資料の選択自身に、研究者の価値判断がかかっているのは、言うまでもない。私はヴェトナムを取り扱った、日本の書物を出来る限り買った。百冊を越えるそれらを見ながら、私は参考文献・資料とは一体何かということ、再び考えさせられた。

洪水のようにヴェトナム関係の出版物が出ながら、それらの紹介がないのは意外である。わずかに、谷川栄彦氏が『国際問題』（日本国際問題研究所、一九六五年四月、第六一号）でなされた親切詳細な文献解題がある位

のようである。このような見事な解題をやる能力を、私は持たない。私はここで、ヴェトナムを語る場合に、忘れることの出来ない一人のヴェトナム研究者を採り上げて、彼の研究視点とその代表的著作を検討してみたいのである。その研究家の名は、バーナード・B・フォール (Bernard B. Fall) である。

彼は秀れたヴェトナム研究家だが、すでにこの世にいない。一九六七年二月、中部ヴェトナムで従軍取材中、ヴェトナム (Viet Cong) の地雷に触れて、四〇才の生涯を閉じた。彼は、アメリカのハーワード大学の教授であった。一九五三年に、彼は始めて、インドシナ戦争の研究のためにヴェトナムを訪れ、それ以後六度も現地を訪れ、自らの研究を深めるといふ、徹底した実証主義者であった。一九六二年には、ハノイ (Hanoi) を訪れ、ホー・チ・ミン (Ho Chi Minh) 大統領、ファン・バン・ドン (Phan Van Dong) 首相と会談している。当然に、彼は多くの著作を残した。統一戦線ヴェトナム (Viet Minh) の政府組織、経済、文化政策などを明らかにした博士号論文 *The Viet-Minh Regime, 1954* を始めとして、主にディエン・ビエン・フー (Dien Bien Phu) の攻防を中心とするインドシナ戦争の分析

を行った *Street Without Joy, 1961* と *Hell in a Very Small Place—The Siege of Dien Bien Phu—, 1966* などがある。更に、私が書評をかねてフォールを評価しようとする二冊の書物を残している。即ち最も有名でヴェトナム研究必読文献ともいふべき、*The Two Viet-Nams — A Political and Military Analysis—, 1963* と論文集 *Viet-Nam Witness* (1953—1966)、1966 年である。フォールの研究成果は、ヴェトナム研究の参考資料として欠くことが出来ないと言われる。日本でも外国でも、多くの人によって引用されている。そこで私は、少し古くなったと言われるかも知れない二冊の書物を、その考察の対象に選んだのである。

※ *The Two Vietnams, New York, 1963.* この書物は五百ページを越す、部厚いものである。その内容は、第一部、共通の基盤、第二部、北部の革命、第三部、南部の反乱、と三つの部分に分けられている。第一部では、ヴェトナムの自然から描写が始まり、一九四五年にヴェトナムが独立を達成するまでのヴェトナムの歴史、主にフランスの植民地支配下の状態を明らかにして、そこに現在二つに分割され闘わされているヴェトナム民族の共通

性を描きだしている。第二部と第三部は、最初から敵対する形で分割された北部と南部の悲劇を描いている。北の革命、南の反乱という題が、その意味内容をおのずと示している。フォール自身が言う如く、「本書の重要な点は、南北ヴェトナム両地域の政治と経済の組織(制度)の比較に、重点を置いている」(vii ページ)のであるが、その他、サブタイトルの如く、軍事面(フランス軍とヴェトナム軍)の分析にも非常に詳しいので、興味深い。

※ *Viet-Nam Witness 1953-66, New York, 1966.*

これは、論文集である。収められた論文の数は全部で二十六篇で、それを歴史的段階で六つに分けている。それらは、(一) フランスのインドシナ喪失、(二) 北部—革命の二〇年、(三) 南部—死産に終った実験、(四) 見えない敵、(五) 苦境に立つ西側、(六) 第二次インドシナ戦争、とから成っている。種々の研究誌や著名な新聞に投稿された評論文をまとめたものだから、*The Two Viet-Nams* ほどの一貫性はない。しかしその時々、極めてトピカルな状況で書かれているということからして、詳細な事実を踏えたものが多く、非常に面白い。期間は一九

五四年、ディエン・ビエン・フーの敗北から、一九六六年二月ホノルル会議までの一三年間にわたっている。この間のあらゆる問題が取り上げられ、その領域の広さは、他に匹敵するものを見出しえない。そこには一貫した姿勢が伺われ、大胆に予側した事態が、かなり適確に事実として現われて来ることを読むのは、快い。

△フォールの視点▽

これら二冊の書物は、当然互いに深い関係を持っている。私には、後者の第四部までの集大成に第二次世界大戦前史を加えて一冊にしたのが、前者であると思われる。そこで、この二冊を中心に、日本は勿論の事、世界的に名の通ったフォールの、ヴェトナム研究の視点やその分析結果の問題点を検討し、ヴェトナムに興味ある人々への、フォール評価の一助としたいのである。まず、フォールの政治分析方法の根底には、権力政治 (Power Politics) 的発想が根強く流れていることを、指摘しなければならぬ。それに加えて、いわゆる客観的・中立的立場で、政治的事件を見るとというのが、彼の視座である。「大局的判断力と目撃したものを冷静に公平に見る能力」⁽¹⁾を以って、彼は淡々と、全ての政権、政策の批判を卒直にやる。「社会科学の研究が、その結論に國家理

性が課せられると、それは共産圏に多くの例がある如く、その価値を失う大きな危険に見舞われる」と⁽²⁾という彼の言葉も、その事を意味している。従って彼は、イデオロギー、特に共産主義に対して好意を持たない。むしろ強い嫌悪感を見せている。そのため、北ヴェトナムにおける、土地改革の一次的、一地方的誤り、百花斉放運動の失敗など、確かにその指摘は大切であるが、それらに対する執拗な追求の深さは、若干奇異の感さえいだかせ

る。次に彼の視点として言えることは、ナシヨナリズムに対する強い憧憬であろう。従っていきおい民族の独立運動 (権威に対する抵抗も含む) に対しては、その分析が深くなる。国王バオ・ダイ (Bao Dai) の対仏抵抗、ゴ・ジン・ジエム (Ngo Dinh Diem) の対仏抵抗、古代の君主や農民の対中国独立闘争、少数山岳民族の独立意識を高く評価するのである。山岳民族・少数民族を平等に扱うという点で、ホー政権も、南ヴェトナム解放民族戦線も、この範疇では点数が高い。第三番目に気づくのは、軍事的研究面における精緻さとその熱意である。一般に、日本という例の憲法第九条に關係する特殊な事情のためか、政治学者は軍事的条件の分析には、余り

ウェイトを置かないけれど、彼の軍事知識の蓄積と資料の豊富さには驚嘆する。ヴェトナムを含めて、後進地域が、人民戦争という型態で帝国主義軍隊に立ち向っている現在、この視点は当然すぎるのかも知れない。最後には、やはり彼の実証主義的側面を指摘すべきであろう。日本の地域研究者は、ほとんど外国文献によって研究を進めるのに対し、何度も現地を尋ねる中で、彼が獲得したものは確かに彼の大きな自信となっている。これは本当の蛇足になるが、客観主義を以ってなるフォールには、フランスに対して若干、かたを持ち過ぎるようである。³⁾ 国籍がフランスにあるためだ、などと言うつもりはないが。

(1) Bernard B. Fall, Viet-Nam Witness, p. 9

(2) Ibid., p. 10

(3) たとえばフランスの植民地支配はそんなに悪いものではなかったとか、第二次世界大戦末期アメリカがインドシナにおいてフランス軍を救助しなかったとして批判するが、フランスが当時、インドシナの再植民地化を考えていたことなど忘れてしまっているのである。まだ指摘する点は多々ある。

△注目に値する指摘と限界▽

前述の視点を前提としながら、これらの書物を読んだ結果、次のように注目に値する点と、不満な点が出て来た。まず、高く評価される点を書きとめておきたい。最初に、北ヴェトナム(ヴェトナム民主共和国)に関する国内・国外双方の分析が非常に詳細で適確であることに注目したい。北ヴェトナムについては通常、礼賛と憎悪に二極分解する研究傾向の中で、冷静に叙述しているのが特徴である。特に中ソの谷間で苦しむ北ヴェトナムの姿、ベトナム軍結成以来対米戦争に至るまでの、人民解放軍の生成発展の分析は非常に参考になる。更に、今まではほとんど問題にされなかったフランス共産党との関係についての叙述は、²⁾ 時のヨーロッパ情勢、植民地所有と本国の共産党の在り方、ホー・チ・ミンの対仏交渉の顛末ともからまって、いろいろの問題を提起している。次には、一般に左翼の側から常に批判されて来たことではあるが、それと若干角度を変えて(パワー・ポリティックスの立場から)、フランス(ジュネーブ協定までの)並びにアメリカのヴェトナム政策を容赦なく糾弾している。フランスの失敗をそのままくりかえしている、アメリカのヴェトナムへの深入りを、強く批判し、「このよ

うな戦場では、西欧の軍隊は時には招かれた、時には招かれざる客である。それに対して敵は常に、その土地のものであり、「いまから二、三〇年後には、その結末がどう出ようと、一九五四年から一九六六年の南ヴェトナムの情勢は、アメリカにとっては中国問題の失敗に続く第二の外交上の失敗であったと、見られるようになるであろう」と、書いてある。この傾向は全般にわたっている。

第三点には、やはり軍事面の分析の深さを高く評価したい。これは、ヴェトナム軍対フランス軍の「汚い戦争」(フランス国内世論や国際世論がフランスを批判して、こう呼んだ)を要領よくまとめた「ディエン・ビエン・フーへの道」にその真髓が出ている。又、北ヴェトナム軍、あるいは南ヴェトナム解放軍の戦略・戦術分析や、ゲリラ戦関係についても説得力がある。彼は現在の戦闘に対してこう言っている——「要するに南ヴェトナムは、これまで西側が共産主義と戦わねばならなかった他のすべての舞台での最悪の特徴を集めている。更に加えて、敵はゲリラ戦に関する全ての古典を読んでいるばかりか、その上に自分自身の新しい章をいくつかつけ加えようとしているのだ。」第四点は、ヴェトナムの闘い

を、いわゆる民族運動の面があると認め、西欧側では常識化しようとしていた、アメリカ國務省の「北からの侵略論」に反対している事を指摘しよう。彼も述べる如く、ゲリラ戦の分析には、やはり毛沢東の「魚と水」の例えを考えなければならぬのである。「この運動は、十年余にわたって徐々に成熟した結果」であって、無理にやろうとすれば「アメリカ國務省白書のように、少くともゲリラ暴行の一部と(北からの)『侵入者』に負わせようとすれば負わせられる。だが、それだけでは、反乱がなぜ広がったのかとか、なぜ根強く続いているのかを説明できない」のである。南ヴェトナム解放民族戦線の形成過程については Viet-Nam Witness の中の一八番目の論文 The Viet-Cong が貴重なので記しておくたい。

第五点は、サンライズ作戦と称して、アメリカ軍と南ヴェトナム政府軍が、農民とゲリラの切り離しをはかった戦略村構想に対する批判をあげたい。イギリスが、かつてマラヤにおいて成功を収めた為に、それをヴェトナムにも適用しようとする作戦を、マラヤとヴェトナムの地理的・経済的・政治的条件の相違から論理的にその失敗を結論づけている。最後の評価すべき点は、永年の研

究の中で、一九五四年九月ゴーク政権発足直後に、この政権の中世的体質を暴露し、⁽¹⁰⁾一九五七年(崩壊の七年前)にゴーク政権の不能を説いた事実⁽¹¹⁾、更に一九五八年にすでにヴェトナムの発生を予測し、⁽¹²⁾一九六二年にはファン・パン・ドンに北爆の可能性を示唆している等⁽¹³⁾のありうべき事態への先見の明であろう。以上七点を述べたが、他にもすぐれた分析や資料が豊富にある。

しかし、一方では、彼の評価や分析方法に不満がないわけではない。気にかかるのは、リアルポリティックスを尊重する彼が、制度や法律的側面を重視する余りに、現実を過少に評価する場面に、しばしば出会うことである。権力の正統的継承の故に、バオ・ダイ政権の比重が一般的に非常に高いのが、そのよい例である。⁽¹⁴⁾その存在基盤の弱さは衆知の事実だったのではなからうか? 例えばジュネーブ会議の最中にフランスとバオ・ダイ政権の間に、ヴェトナム独立協定が締結されるが、それは死の瀬戸際に財産を与えられるようなもので、彼の如く意義深く考えることは出来ないのである。⁽¹⁵⁾こういう観点に立つ為に、相対的にヴェトナムに対する比重は軽くなってしまうのである。同じ事は、第二次大戦終了後のフランス帝国主義のヴェトナム再侵略に対しても言えるので

あり、法的に違反ではないからということ、何ら批判に値しないという形に落ち着いてしまうのである。次に、事実の裏にある論理の追求が、もう一步不足なのが納得できない。他の追隨を許さないような豊富な資料を駆使して、詳しい経済状況の分析をやっておりながら、⁽¹⁶⁾最終的に誰が、どの階級がその指導権を握っているのかについては、なんら明らかにされていない。同じように不満と限界を感じるのは、ジュネーブ協定の評価とその侵犯のプロセスの扱いである。何故にあのような形で協定が結ばれ、何故にその後すぐにヴェトナムに於いて米・仏の勢力交代が起ったのか、その辺の論理が事実関係の羅列だけでは釈然としないのである。

ジュネーブ協定の侵犯は当然の事として起ったということになるのであろうか? それからは、必然的にヴェトナムの分割を決定的なものとした、一九五六年の統一選挙(フォーール自身も或る種の期待を寄せていた)を、アメリカとゴーク政府が拒否したことさえ、批判されないということになってしまったのである。一九六三年一月のゴーク政権打倒のクーデターの分析においても、その事実関係⁽¹⁷⁾だけが問題ではなく、その事象の裏にひそむマキユアベリズムを告白しなければならぬと思うのだが。

第三番目には土地改革についてである。後進国において、土地改革の重要性を見のがせないのは、彼も認める通りである。しかし、ここでも彼は土地改革は、北部では自作農が多かったので簡単であり、南部では大土地所有のパーセンテージが高くて難しかったという事を基本要素としている。⁽¹⁸⁾一方ではヴェトナムの行った土地改革を一応評価しているのであるから、そこでやはりゴ・シン・ジエムの土地改革のごまかしを徹底的に、批判する視点が、出て来るはずだと思ふのである。第四番目には軍事的研究については何度も述べたが、ここでも人民解放軍の士気が高く、勝利を得ることができるのは、共産主義思想を叩きこまれるからであるとしている。しかし実体はそんなことだけでは、わり切れないのではなからうか。人民戦争の形態、イデオロギーは、只地型と精神の問題だけでは片ずかない。

最後に、階級闘争の視座を持つ者にとっては、不思議な事だが、インドシナ共産党の解党⁽¹⁹⁾(一九四五年一月)という重要な問題を、単に戦術的なこととして、簡単に片づけていることを述べておかねばならない。

- (1) cf. Bernard B. Fall, *The Two Viet-Nams*, pp. 197—200
- (2) cf. Bernard B. Fall, *Viet-Nam Witness*, pp. 22—29
- (3) *Ibid.*, p. 40
- (4) *Ibid.*, p. 137
- (5) cf. *The Two Viet-Nams*, pp. 104—129
- (6) *Ibid.*, p. 343
- (7) *Viet-Nam Witness*, p. 11
- (8) *The Two Viet-Nams*, p. 330
- (9) cf. *Viet-Nam Witness*, pp. 272—273
- (10) cf. *Ibid.*, pp. 51—68
- (11) *Ibid.*, p. 7
- (12) cf. *Ibid.*, pp. 160—189
- (13) *Ibid.*, p. 114
- (14) cf. *Ibid.*, pp. 41—50
- (15) cf. *Ibid.*, pp. 51—68
- (16) cf. *The Two Viet-Nams*, pp. 289—315
- (17) *Ibid.*, p. 288
- (18) cf. *Viet-Nam Witness*, pp. 178—180
- (19) *The Two Viet-Nams*, p. 65

ヴェトナム和平のためのパリ会議は、膠着状態のまま一九七〇年を迎えた。一方では、アメリカ軍の、わずかな数ではあるが、撤退の報が伝えられている。この長い戦争が、世界史に残しつつある重い教訓を、怠りなく発掘する義務を、私達は深く感じている。そのような時に、フォールの死は大きな損失であるが、彼の残した膨大な遺産は、ヴェトナム研究の為に不可欠の素材として、私達を勇気づける。(一九七〇・一・一五)

追記、なお、両著とも訳本が出ている。私も参考にさせていただいた。

The Two Viet-Nans は高田市太郎訳『二つのベトナム』

毎日新聞社一九六六年

Viet-Nam Witness は松元洋訳『ヴェトナム戦史』至誠堂

一九六九年